

明治期東京語における 人の出入りの際の挨拶表現

—— 近世後期江戸語との比較 ——

山 田 里 奈

1. はじめに

本稿では、明治期東京語における人の出入りの際の挨拶表現¹について、近世後期江戸語における人の出入りの際の挨拶表現との比較を行ないながら明らかにすることを目的としている。近世後期江戸語における人の出入りの際の挨拶表現については、山田(2023)で概観を示した。概観を示すことも必要な作業であったが、そこから各挨拶表現についての詳細な考察を行なう必要があるだろう。そこで本稿では、明治期東京語の人の出入りの際の挨拶表現の使用について、近世後期江戸語のそれと比較しながら、当期の挨拶表現について明らかにしたい。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 先行研究

前田富禎(1985)によると、近世に入って、挨拶の言葉は多様化したとされる。これについては、「近世の社会構造が複雑化し、人と人との関わり方も様々となり、言葉の使いわけも多様化したため(P.85)」と述べている。

¹ 『日本語学大辞典』(東京堂出版)によると、「挨拶」は、「慣用化されたものかどうか」が認定の基本条件」とされている。そして、「あいさつことばが有する特徴」として、「①ふれあいの機能を持つ、②表現内容に意味がない、③表現形式が定型化しており、いったん定型化したものは、次第に簡略化する、④話し手と聞き手の関係によって、待遇表現やしぐさ・行動が決まる(友定賢治「挨拶」P.3)」が挙げられている。本稿では、②の特徴を完全に有しているとは言い切れないが、人が出会う場面で使用される表現を広く扱い、「挨拶表現」とする。

(2)

山田 (2023) では、前田 (1985) 等を踏まえつつ、出入りの場面を 4 つ設定することにより、現代語において「いってらっしゃい」と「ってきます」を使用する場面や「ただいま」と「おかえり」を使用する場面での挨拶は用例数もバリエーションも少なく、「ごめんください」と「いらっしゃい」を使用する場面や「おはよう・こんにちは等」と「さようなら」を使用する場面での挨拶は用例数もバリエーションも多いという傾向を見出した。

2.2 問題の所在と本稿の目的

人の出入りに関わる挨拶表現について、先行研究や『日本国語大辞典 (第二版)』、山田 (2023) の記述を使用場面ごとにまとめると、次の【表 1】のようになる。

【表 1】を見ると、『日本国語大辞典 (第二版)』 (以下、『日国』と記す) における初出例と先行研究との間にずれが見られる例 (「いってまいります」の早い例の捉え方) や近世後期江戸語ではどのような表現が使われていたのか不

【表 1】 人の出入りに関わる挨拶表現

場面	使用する場面 (現代語の例)	先行研究に挙げられている例や記述	山田 (2023) 近世後期江戸語に見られた例	『日本国語大辞典 (第二版)』の初出例
場面 1	去る側の挨拶 (いってきます)	いってまいります (人情本)	いってまいります、いってさんじます、いってきます等	〔初出〕いってまいります (昭和 18)
	見送る側の挨拶 (いってらっしゃい)	おはようお帰りをなされませ (人情本)	いってきねえ ※定型化した挨拶としての使用は見られにくい	〔初出〕いってらっしゃい (昭和 10)
場面 2	戻った側の挨拶 (ただいま)	ただいまかえりました (人情本)	ただいま (は)、ただいまかえりました、今かえりました等	〔初出〕ただいま (洒落本)
	出迎える側の挨拶 (おかえり・おかえりなさい)	—	おかえりだ、おかえりか、おかえり	〔初出例〕おかえり (明治 21) おかえりなさい (明治 20)
場面 3	訪問した際の挨拶 (ごめんください)	—	ごめんください系、ごめんなさい系、おたのみもうします	〔初出〕ごめんください (滑稽本)
	迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい、おいでなさい、ようこそ)	おいでなさい (滑稽本)	いらっしゃいませ※店員の挨拶が多い おいで系、おいでなさる系、おいでくださる等	〔初出〕おいでなさい (滑稽本)
場面 4	出会った際の挨拶 (相互に使用可能) (おはよう、こんにちは等)	近世後期に増える	おはようございます、おはよいの	〔初出〕おはよう (人情本)
			こんにちは、こんにちは	〔初出〕こんにちは (滑稽本)
			こんばんは	〔初出〕こんばんは (洒落本)
	ごきげん系		〔初出〕ごきげんよう (洒落本) ※挙例は〈さようなら〉の意	
去る側の挨拶 (さようなら)	さようなら単独 (滑稽本)	さようなら、さらば、おさらば等	〔初出〕さようなら (洒落本)	
	—	ごきげん系	〔初出〕ごきげんよう (洒落本)	
	—	よろしく申しておくれ、おいとま系	〔初出〕おいとま申す (17C 中)	

※表中の太字は、用例数とその場面において比較的多く見られたことを示している。

明の挨拶（出迎える側の挨拶等）があることがわかる。これを明らかにするために、山田（2023）では場面ごとの使用状況を示した。しかし、特に、表中の網掛けをした箇所については、以下のように問題が残っていると考えられる。

(1) 見送る側の挨拶「いってらっしゃい」について

「いってらっしゃい」の初出例は、『日国』によると1935（昭和10）年である。しかし、近世後期江戸語では見送る側の挨拶表現はほとんど見られなかった。また、江戸後期から明治20年代における〈行く・来る・居る（補助動詞を含む）〉の意を表す「いらっしゃる」が発達するが、それとの関係も明らかではない。

(2) 出迎える側の挨拶「おかえり」「おかえりなさい」について

『日国』では、明治20年前後が「おかえり」「おかえりなさい」の初出例とされているが、山田（2023）では近世後期江戸語に「おかえり」の用例が1例見られた。「おかえり」、つまり、「お+動詞連用形」は、「お+動詞連用形+なさい」の「なさい」が省略した形であるが、先に「お+動詞連用形」に当たる「おかえり」の例が見られたことになる。明治期まで用例を見ることで、つながりが見えるのではないかと考えられる。

(3) 訪問した際の挨拶「ごめんください」「ごめんなさい」について

『日国』の初出例も、山田（2023）の調査でも、「ごめんください」は滑稽本から見られた。しかし、山田（2023）で挙げたように、当期の訪問した際の挨拶では、「ごめんなさい」「ごめんなせへ」等も使用されており、「ください」が接続する形に留まらない。〈てくれる〉の敬語形「くださる」の発達との関係からの考察が必要ではないかと考えられる。

(4) 「ごきげんよう」について

近世後期江戸語では、「出会った際の挨拶」の「ごきげんよう」は形にばらつきがあり、「去る側の挨拶」では形のばらつきが少ないことから、去る側の挨拶の方が一般的であったのではないかと考えられた（山田（2023））。明治期になるとどうか考える必要がある。

以下、第3節で調査対象資料と方法について述べ、第4節で明治期東京語における人の出入りの際の挨拶表現について考察を行い、第5節でまとめる。

(4)

3. 研究対象資料・方法

調査対象資料と方法について述べる。

3.1 調査対象資料

明治開化期から明治20年代までの小説を用いて調査を行なった。詳細は最終ページの通りである。会話で用いられた例のみを扱った。なお、明治20年代までとしたのは、話し手と聞き手の上下関係を判断する際に、近世後期江戸語と同じ基準で考えることができるのは、明治20年代までだと判断したためである。明治30年代以降については今後の課題とする。

3.2 方法

用例の収集や考察の観点は、以下の通りである。

- (1) 人の出入りの場面で使用される言語表現を用例として収集した。ただし、久しぶりに会う場合に用いる「ひさしぶり」や「ご無沙汰」「しばらく」を用いた表現は除外した。
- (2) 定型化、固定化されたとはいえない例まで広く収集した。
- (3) 考察の観点として、①話し手の階層²、②話し手と聞き手の上下関係³、③どのような場面で使用されているかの三点を設定した。場面は、以下の四分類である。

場面1：去る側の挨拶と見送る側の挨拶

場面2：戻った側の挨拶と出迎える側の挨拶

場面3：訪問した際の挨拶と迎え入れる側の挨拶

場面4：出会った際の挨拶と去る側の挨拶

4. 明治期東京語における人の出入りの際の挨拶表現

以下、近世後期江戸語における人の出入りの際の挨拶表現（山田（2023））と、明治期東京語におけるそれを比較しながら、考察を行なう。

4.1 去る側の挨拶と見送る側の挨拶

近世後期江戸語（山田（2023））と明治期東京語の挨拶表現をまとめた表が、次の【表2】である。

² 本文中の説明、話し手と聞き手の言葉遣いにより判断した。

³ 話し手と聞き手の上下関係は社会的身分や、言葉遣いによって、〈下→上〉の関係、〈対等〉の関係、〈上→下〉の関係に3分類した。

【表2】 去る側の挨拶と見送る側の挨拶

場面	使用場面 (現代語の例)	命令形 /命令形 以外	挨拶表現	近世後期 江戸語	明治期 東京語
1	去る側の挨拶 (いってきます)	命令形以外	いってきましょう・いってきます	1	2
			いってこよう・いってくる	1	4
			いってまいります・いってめへります	6	4
			いってさんじます	1	0
	見送る側の挨拶 (いってらっしゃい)	命令形	いっていらっしゃいまし	0	2
			いらっしゃいまし	0	2
			いってきねへ・いってきてくんねへ	1	2
合 計			10	16	

(1) 去る側の挨拶

でかける際には、次の例1のように「いってまいります」が用いられていた。これは、近世後期江戸語から明治期東京語において共通している。

(例1) (雪) ぢやア行て参ります。

(権) 其の轎車に乗てお出で。而して歸りハ親父さんに乗けて來る方が早くツていゝ。

(お雪→森村権一郎) 【〈下→上〉の関係】 [『緑』283]

例1は中流女性から戸長の息子に対して用いられた例である。自身の家を出る際の挨拶として用いられており、〈下→上〉の関係で用いられていることから、高い敬意を表していることがわかる。他に、「いってくる」(例2)や「いってきます」(例3)の例が見られた。

(例2) (勝) ぢやァ、行つて来るよ。

(三吉) うむ。行つて来て呉んねえ。大概、大概ぢやアねえ、本統に大丈夫だらうなア。(芸妓お勝→下層男性三吉) 【〈対等〉の関係】 [『浅瀬』286]

(例3) 今行つて来ますよ。(嫁お都賀→義父) 【〈対等〉の関係】 [『黒蜥』252]

例2は芸妓のお勝から下層男性の三吉に対して、例3は嫁から義父に対して用いられた例である。例2のように敬語を使わない間柄では「いってくる」が使われ、例3のように丁寧語を使う間柄では「いってきます」が使われている。

(6)

人間関係により形が変化するようになってきているという点で、出かける際の挨拶が体系的に使われるようになってきているのではないかと考えられる。

(2) 見送る側の挨拶

見送る側の挨拶としては、近世後期江戸語では「いってきねへ」しか見られなかったが、明治期東京語になると、「いっていらっしゃいまし」や「いらっしゃいまし」の使用が見られるようになる。次の例4は、「いっていらっしゃいまし」の例である。

(例4) 畏諾りました。往ていらツしやいまし。(妻お辻→夫達三)【〈対等〉の関係】[『妹と』218]

例4は妻から夫に対して用いられた例である。2節でも触れたが、『日国』によると、「いってらっしゃい」の初出例は1935(昭和10)年とされている。例4のように、補助動詞「ていらっしゃいまし」を下接した「いっていらっしゃいまし」の使用は、見送る側の挨拶としては、かなり早い例であると考えられる。

次の例5は、「いらっしゃいまし」の例である。「いらっしゃいまし」は、点線を付したように、「おしずかに」とともに用いられていた。

(例5) お静にいらツしやいまし。左様ならツ。(女中→客)【〈下→上〉の関係】[『当世』100]

例5は女中から客に対して用いられた例である。近世後期江戸語から明治期東京語にかけて、高い敬意を表す相手に対して、「おしずかに」とともに高い敬意を表す表現が用いられることは共通している⁴。

(3) 〈行く・来る・居る(補助動詞を含む)〉の「いらっしゃる」との関係

「いらっしゃる」は、近世後期から明治20年前後にかけて発達する〈行く・

⁴ 近世後期江戸語では、「おしずかに」は、次の例のように「あそばしまし」とともに用いられ、「おしずかに」の形で用いられたりする例も見られる。いずれも〈下→上〉の関係である。

(例) おあぶなうございますヨ。お静に遊しまし。(中流女性嫁→中流女性姑)[『風呂』121]

(例) ハイ、。ヘイあなたお静に。(下女弥寿→主人)[『風呂』122]

来る・居る（補助動詞を含む）の尊敬語である。その発達過程として、使われだした当初は、「ます」を下接した「いらっしゃいます」の方が多く用いられる傾向にあり、挨拶としての使用は、迎え入れる側の挨拶として、店員の使用が目立つ傾向にあった（山西正子（1972）、山田（2012））。補助動詞としての「ていらっしゃる」は、洒落本では1例しか見られず、意味も〈ている〉のみであったことが指摘されており（山西（1972））、近世後期江戸語では見られにくかった。しかし、明治20年以後になると、補助動詞としての使用も多くなる（山西（1972））。例4は、明治18年の『妹と背かがみ』の例である。家の出入りの際に、補助動詞をつかった見送る側の挨拶として使用している点は、「いらっしゃる」の発達過程の中で生じた表現であることがわかる。

(4) まとめ

明治期東京語では、去る側の挨拶として「行ってまいります」「行ってきます」「いつてくる」が人間関係に即した形で用いられるようになる。見送る側の挨拶としては、近世後期江戸語にはほとんど用例が見られなかったが、「いつていらっしゃいまし」や「いらっしゃいまし」の使用が見られるようになる。当期は、〈行く・来る・居る（補助動詞を含む）〉の尊敬語「いらっしゃる」が発達する時期であるが、見送る側の挨拶へも進出しているといえる。

4.2 戻った側の挨拶と出迎える側の挨拶

近世後期江戸語（山田（2023））と明治期東京語の挨拶表現をまとめた表が、以下の【表3】である。

(1) 戻った側の挨拶

戻った側の挨拶は、近世後期江戸語に引き続き、以下の例6のように「ただいまかえりました」や例7のように「今かえった」の例が見られた。

(例6) (お鈴、お留、お勝) 「やあ、お^{かへり}帰来ですか。」

(お種) 「唯今帰りました。」

(主人お種→家の者たち) 【〈上→下〉の関係】 [『多情（後編）』310]

(例7) (鉄) 「あら御母様！」

(母) 「今帰つたよ。」 (中流女性娘→中流女性母) 【〈対等〉の関係】 [『二人』269]

【表3】戻った側の挨拶と迎え入れる側の挨拶

場面	使用場面 (現代語の例)	命令形 ／命令形 以外	挨拶表現	近世後期 江戸語	明治期 東京語
2	戻った側の挨拶 (ただいま)	命令形以外	ただいまかえりました	4	2
			ただいま (は)	1	2
			今かえりました	1	0
			今かえった・けえった	1	1
	出迎える側の挨拶 (おかえり)	命令形	おかえりあそばせ	0	1
			おかえりなさいまし	0	2
			おかえりなさい	0	2
			おかえり	1	0
		命令形以外	ごきげんようおかえりになりました	0	1
			おかえりでございました	0	1
			かえってきてくださいました・くだすった	0	1
			おかえりです	0	1
			おかえりであった	0	1
			おかえりだ・おかえりか	9	0
合 計			17	15	

例6は点線部の「やあ、おかえりですか」と出迎えられたのに対し、「只今帰りました」と戻った側が使用した例である。主人が家の者たちに、自分が帰ったことを述べている。例7は母親から娘に対して用いられた例である。「ただ」を付けずに、今帰ったことを述べている。このような使用は、近世後期江戸語から見られる。また、明治期東京語になると、例8のように「は」を下接しない「ただいま」の例が見られた。

(例8) ハイ只今大層遅かつたらうネ。(中流女性お政→中流男性文三)【〈対等〉の関係】『浮雲』16]

例8は中流女性から中流男性に対して用いられた例であり、自分が帰った際に「ただいま」を用いている。「ただいま」は、『日国』に「(「ただいま帰りました」の略) 出先からもどったときなどの挨拶(あいさつ)のことば。」と説明されているが、本稿が対象とした明治期東京語の資料においては、「ただいまかえりました」も、省略された「ただいま」単独の形も使用が見られた。

(2) 出迎える側の挨拶

出迎える側の挨拶として、現代語の「おかえり」に相当する表現には、「おかえりあそばせ」や「おかえりなさいまし」「かえってきてくださった」「おかえりです」等の用例が見られた。近世後期江戸語では、「おかえり」の例が1例見られたが⁵、明治期東京語では、例9の「おかえりなさい」や、例10の「おかえり」の例が見られた。

(例9) お帰^{かえん}なさい。如何でした團子坂は。(中流男性文三→中流女性お勢)【〈対等〉の関係】[『浮雲』41]

(例10) 御^おカーへり。(車夫→客の家の者)【〈下→上〉の関係】[『花間』167]

例9は「お+動詞連用形+なさい」の形「おかえんなさい」である。話し手の男性と聞き手の女性は一緒に暮らしており、親しい間柄である。例10は、車夫が客の家の者に対して、帰ってきたことを知らせる際に「おかえり」を用いた例である。明治期にはこのような「おかえり」が2例見られ、挨拶としての「おかえり」の使用は見られなかった。

さらに、明治期東京語になると、相手に応じて尊敬語の表現形式を用いるようになる。次の例11は、夫の素振りから、夫に挨拶を言いそびれたという地の文での使用例である。

(例11) 夫の素振りに胸ギックリ「お帰り遊ばせ」も言ひそゝくれ、済まぬ顔して背に踵き。〈下略〉(中流女性妻→中流男性夫)【〈対等〉の関係】[『細君』48]

「お帰り遊ばせ」も言ひそゝくれ」とあることから、「お帰り遊ばせ」が、家に戻った相手に対して用いる挨拶として認識されていると考えることができる。また、次の例12は、妹から兄に対して、「お+動詞連用形+まし」が用いられた例である。

(例12) 兄さんお歸りなさいまし。(中流女性妹お雪→中流男性兄)【〈対等〉の関係】[『緑叢』265]

⁵ 次の例が見られた。

(例) 慈母おかへり(中流女性遠世→中流女性おみき)[『閑情末摘花(四編五編)』74]

例 12 は妹から兄に対して用いられた「お帰りなさいまし」の例である。例 11 や例 12 のように、「帰る」を尊敬表現形式とともに用いる表現が明治期東京語では見られやすくなる。つまり、出迎える側の挨拶が人間関係を反映させた尊敬表現形式を用いて使われるようになってきている。この段階を経る、または同時期に、「なさい」が省略された挨拶としての「おかえり」が生じたと考えられ、過渡的段階の使用状況といえるだろう⁶。

4.3 訪問した際の挨拶と迎え入れる側の挨拶

近世後期江戸語（山田（2023））と明治期東京語の挨拶表現をまとめた表が、以下の【表 4】である。

(1) 訪問した際の挨拶

明治期東京語では、近世後期江戸語と同様、訪問した際の挨拶として、「ごめんくださいまし」「ごめんください」のように「ください」を下接する例と、「ごめんなさい」「ごめんなせへ」「ごめん」ように、「ください」を下接しない例が見られた。以下の例 13、例 14 は、明治期東京語における「ごめんくださいまし」と「ごめんください」の例である。

(例 13) (文) オ、越山君、サア是へ掛給へ／＼。

(卓) 御免下さいまし。イヤ齋藤君、其後はかけ違つて御目に懸りませんでしたが、先づ君にも御壯健で何より。(山田文治→越山卓一)【〈対等〉の関係】[『緑蓑』323]

(例 14) [門口の溝板に取次を為せて]

「御免下さい」〔と優しい声で音信れて来た人が有つた。〕(杉野直子→阿園)【〈対等〉の関係】[『ふく』31]

例 13 は、中流男性が知り合いの家を訪問した際の挨拶として「ごめんくださいまし」を用いた例である。例 14 は中流女性が知り合いの家を訪問した際の挨拶として、「ごめんください」を用いた例である。どちらも〈対等〉の関

⁶ 近世後期に 1 例見られた「おかえり」は、「おかえり」の早い例とも考えられるし、「おかえりだ」「おかえりか」のように帰ってきたことをそのまま述べた例の一例とも考えられる。これに関しては、もう少し用例を増やして見ていく必要がある。ただし、「お+動詞連用形(おかえり)」が「お+動詞連用形+なさい(おかえりなさい)」の「なさい」の省略形と考えるならば、人間関係を反映させた様々な言い方が生じた明治期の様相が見られてからでないとと言えないだろう。

【表 4】 訪問した際の挨拶と迎え入れる側の挨拶

場面	使用場面 (現代語の例)	命令形 ／命令形 以外	挨拶表現	近世後期 江戸語	明治期 東京語
3	訪問した際の挨拶 (ごめんください)	命令形	ごめんくださり (い) まし・ごめんください	8	5
			ごめんあそばしまし・ごめんあそばせ	0	2
			ごめんなさり (い) まし・ ごめんなさい・ごめんなせへ	12	12
			ごめん	0	4
			おゆるしなせへ	0	1
		命令形以外	おたのみもうします・たのんます	10	4
			ご案内をねがいます・ちよいとうかがいます	0	2
	迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい、 ようこそ)	命令形	おいであそばせ	0	1
			おいでなさり (い) まし (せ)・なんし	10	4
			いらっしゃり (い) まし・ませ	2	12
			いらっしゃい	0	7
			おいでなさい・おいでなせへ	4	1
			おいで	4	0
			きたまへ	0	2
		命令形以外	おいでなさってくださいます	2	0
			(よく) おいでくださいました・ おいでくださった	0	3
			いらしってくださいました・くださった	1	1
			(よく) 来ておくんなさいました	0	1
			おいであそばしました・おいであそばした	1	0
			ごきげんよくお尋ねくださいました	0	1
			(よく) 来てくださった	1	1
			(よく) 来ておくれだ	1	3
			おいでなさり (い) ました	13	0
			(よく) いらっしゃり (い) ました	7	8
			ようこそござんした	1	0
			いらしった	1	0
			(よく) きなすった	1	1
(よく) おいでなさ (す) った・ おいでました			2	1	
おいでだ・おいでか			8	2	
(よく) まいった・きた			0	2	
まいどありがとう		0	1		
合 計			89	82	

係で用いられているが、丁寧な言葉遣いととも用いられていることから、丁寧な挨拶表現であると考えることができる。

以下の例 15、例 16 は、明治期東京語における「ごめんなさい」「ごめん」の例である。

(例 15)〔水澤の新宅(此月また轉宅せり)の勝手口から。しきりに腰かゝめて〕

「御免なさい」〔をいへば〕

「八百屋さんかへ。けふハ不要ヨ」〔〈中略〉と下女の挨拶〕

(お春→水澤宅の誰か)【〈対等〉の関係】〔『妹と』220〕

(例 16) (文)「御免よ、此方ハ慥か森村さんの御宅だネ、ハイ御免ヨ / \。」

(女)「ヘイ入らッしやいまし、森村ハ此方でございますが、何方様から……。」

(中流男性山田文治→お雪宅)【〈上→下〉の関係】〔『緑蓑』314〕

例 15 は義理の姉に当たるお春が水澤宅へ訪ねて来た際の挨拶として「ごめんなさい」が、例 16 は中流男性が助けに来た女性の自宅とされる場所を訪れた際の挨拶として「ごめん」が用いられた例である。例 15 は普段の生活の中で八百屋が尋ねた際にも使う挨拶、例 16 は中流男性が下層の住宅を訪れる際の軽い挨拶である。「ごめんください(まし)」の方がより丁寧な言い方であるといえる。他に、次の例 17 のように、「おたのみもうします」の例も見られた。これも近世後期江戸語と同様の傾向である。

(例 17)「御頼み申します / \。」〔と叫びながら門の戸を破るゝばかりに扣ものあるにぞ〕(回天社の使いの者→国野宅)【〈下→上〉の関係】〔『花間』230〕

例 17 は使いの者が尋ねた際に、訪問先に相手がいるかどうかわからない状況で「おたのみもうします」を使用した例である。他の例も同じ状況で用いられていた。

したがって、訪問した際の挨拶として、「ごめんください」系、「ごめんなさい」系、「おたのみもうします」が使用される傾向は、近世後期江戸語から明治期東京語において同じであると考えられる。ただし、話し手と聞き手が、高い敬意を表す関係にある場合、「ごめんください」系、相手がいるかどうかわからないときに「おたのみもうします」を用いる傾向が見受けられる。

(2) 〈てくれる〉の尊敬語「てくださる」との関係について

訪問した際の挨拶として、話し手と聞き手が、高い敬意を表す関係にある場合に、「ごめんなさい」系よりも、「ごめんください」系が選択される傾向が見出されるが、これは、〈(て) くれる〉の尊敬語「くださる」の発達の影響が考えられる。尊敬表現形式「お〜くださいませ」「お〜ください」は、江戸後期の使用では用例が少なく、高い敬意を表し、話し手と聞き手の関係の範囲が狭いことがわかっている(湯沢(1954)、辻村(1968)、工藤(1979)、山田(2017))。それが明治期になると、使用される関係の範囲に広がり認められるようになる。そして、高い敬意を表す表現から先に「お〜なさいまし」ではなく、〈てくれ〉を使った表現へと移行する(山田(2017))。「ごめんくださいませ」「ごめんください」も、この〈(て) てくれ〉の変化の流れに合わせて、高い敬意を表す場面における挨拶として用いられるようになっていないかと考えられる。

(3) 迎え入れる側の挨拶

迎え入れる側の挨拶は、近世後期江戸語からバリエーションも用例数も豊富であることから、発達した挨拶であると判断できる(前田(1985)、山田(2023))。明治期東京語になると、バリエーションが豊富であった近世後期江戸語から、「いらっしゃい」系(「いらっしゃいます」「いらっしゃる」(それぞれ命令形も含む)をまとめて指す場合、「いらっしゃい」系)と呼ぶ。)へ移行する傾向が見られる。以下の例18は「いらっしゃいませ」、例19は「いらっしゃいました」、例20は「おいでなさいまし」の例である。

(例18) オヤ入らっしゃいませ。大分朝晩ハ暮し能くなりました。今日ハお出でにならふかと思ってお待ち申して居りました。(中流女性お春→中流男性国野)【〈対等〉の関係】[『雪中』下編158]

(例19) よう入らつしゃいました。(65～66歳くらいの女隠居→藩士山口昇)【〈下→上〉の関係】[『二人』201]

(例20) 是ハ旦那、お出なさいまし。此方が風が能く通りますから。(越山卓一→森山剛蔵)【〈下→上〉の関係】[『緑蓑』267]

例18は、中流女性が中流男性を出迎えた際の挨拶として「いらっしゃいませ」が用いられた例である。例19のように、出迎える際に命令形ではなく「いらっしゃいました」を用いる例も見られた。この場合、「よう」とともに用いられ

(14)

ている。例 20 は「おいでなさいまし」が用いられた例である。近世後期江戸語では、命令形以外の「おいでなさいます」の例がよく見られたが、明治期東京語になると用例が見られにくくなっている。また、近世後期江戸語では、話し手と聞き手の上下関係に応じて、「おいでなさい」や「おいでか」が用いられており、「おいでなさる」系が挨拶表現として一般的であった。

しかし、明治期になると「くださいます」「くださる」を下接した例が目立つようになる。次の例 21 は「おいでくださいました」の例である。

(例 21) ドウか一度御目に掛りたいと思ふて居りましたが、今日はマアよう御出で下さいました。(春田の妻→お春たち)【〈対等〉の関係】[『花間』223]

例 21 は中流女性が家に招いた客に対して「おいでくださいました」を用いている。

(4) まとめ

したがって、訪問した際の挨拶としては、近世後期江戸語に引き続き、「ください」を下接した「ごめんください」とそうではない「ごめんなさい」、「おたのみもうします」が用いられている。ただし、より丁寧な言葉遣いをする場合に、「ごめんください」を使う傾向が見られる。迎え入れる側の挨拶は、「いらっしゃい」系と「くださる」を下接した表現へと変化している。これは、4.1 の見送る側の挨拶として「いっていらっしゃいまし」が使われるようになるという現象と同様に、「いらっしゃる」の発達に関係していると考えられる。また、「くださる」の発達も挨拶表現に影響を与えている。

4.4 出会った際の挨拶と去る側の挨拶 (例「おはよう」と「さようなら」)

近世後期江戸語 (山田 (2023)) と明治期東京語の挨拶表現をまとめた表が、以下の【表 5】である。

(1) 出会った際の挨拶

出会った際の挨拶として、「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「ごきげんよう」が近世後期江戸語に引き続き用いられている。次の例 22 は、「おはよ

【表5】 出会った際の挨拶と去る側の挨拶

場面	使用場面 (現代語の例)	命令形 ／命令形 以外	挨拶表現	近世後期 江戸語	明治期 東京語
4	出会った際の挨拶 (おはよう、こん には、こんばん は)	命令形以外	おはようござり (い) ます	9	4
			おはやい (ね・の)	9	0
			おはよう	2	1
			こんにちは・こんちは	9	7
			こんばんは	1	3
			ごきげんようございます	1	1
			ごきげんよう・ごきげんよろしゅう	5	12
			これはこれは	0	1
	去る側の挨拶 (さようなら)	命令形	よろしくもうしておくれ・よろしくいって	1	1
			ごめんくださいまし・ごめんください	1	1
			ごめんなさいまし・ごめんなさい	0	3
		命令形以外	おいとま (を) いたします・もうします	11	5
			おいとま (を) します・おいとま	2	5
			おわかれもうします	1	0
			かえりましょう・かえります	0	3
			ごきげんよう・ごきげんよろしゅう (ございました)	11	2
			お邪魔をいたしました・しました	0	2
			ご遠慮もうします	0	1
			おさらば・さらば	10	2
			しからば	9	0
			そんなら	7	0
			それじゃあ	0	1
			そんならこれで	0	1
			じゃあまた・また	0	2
			あばよ	1	1
			あばあば	4	0
			さようなら (ば)	39	14
			またのちほど	1	0
いずれ近日・いずれまたそのうちに	0	2			
失敬	0	14			
失礼・失礼ですが	0	2			
合 計				134	91

(16)

うございます」の例である⁷。

(例 22) ヲヤ吉さんお早うございますネ。よつくお出なさいまし。何樓のおあまりですへ。(新造お秀→中流男性吉住)【〈下→上〉の関係】[『当世』133]

例 22 は新造が朝から訪れた客に対して、点線部「おいでなさいまし」で出迎え、「おはようございます」を用いていて挨拶している。

また、次の例 23 の「ごきげんよろしゅう」や例 24 の「ごきげんよう」の例も見られた。

(例 23) (阿澄)「オヤ、何もお珍らしい、是れハ入ッしやいまし。誠に久潤でございましたネー。マア御機嫌宜しう。〈下略〉」

(孝)御機嫌宜しう。只た今着したばかり。エー新橋から烏渡社へ寄つて、夫から直に駄付たので。先生ハ、エ、御宅。」

(中流女性阿澄→中流男性齊藤孝)【〈対等〉の関係】[『緑蓑』372-373]

(例 24) 父ちゃん御機嫌よう。(娘→父)【〈対等〉の関係】[『春雨』349]

例 23 では、「ごきげんよろしゅう」と「ごきげんよう」を互いに用いている。例 24 では、娘が父親に対し「ごきげんよう」を用いている。「ごきげん」を用いた挨拶は、〈対等〉の関係で、親子のような親しい間柄でも用いられ、互いに挨拶として用いられた表現であると考えることができる。

(2) 去る側の挨拶

去る側の挨拶は、近世後期江戸語から引き続き、「さようなら(ば)」の例が多い。

(例 25) ヲヤモウ御帰路かハイさやうなら。(西洋好き→隣にいた客)【〈対等〉の関係】[『安愚』140]

例 25 は、隣にいた客が帰ろうとするのを見て、「さようなら」を用いている。

⁷ 次の例のように「おはようございました」の例も見られた。

(例) お兄イさん、大層お早うございました。(中流女性妹→中流男性兄) [『緑蓑』331]

明治期東京語においても、「さようなら」が一般的に用いられていたと考えられる。他に、「ごきげんよろしゅう」(例 26)、「ごきげんよう」(例 27)、「じゃまた」(例 28)等の例も見られた。

(例 26) 妾も本当に安心いたしました。左様なら、御機嫌よろしゅう。(阿園→杉野直子)【〈対等〉の関係】[『ふく』30]

(例 27) 夫れならば御機嫌よう。(中流男性秋野→父)【〈対等〉の関係】[『花間』233]

(例 28) ぢや又、……お大事に為さい。(中流男性柳之助→中流女性お種)【〈対等〉の関係】[『多情』193]

例 26 は金持ちの女性が自分に対して丁寧な態度をとるため、気持ちに余裕のなかった話し手は、「いよ／＼気の毒でならな」くなり、例 26 のように「云捨た儘、一礼して直に学校の外へ逃出」す際に「ごきげんよろしゅう」を使っている。親しくない間柄で、丁寧な言葉遣いで話す場合に用いられている。例 27 は、急遽遠くへ行かなければならなくなった男性が病気の父親に別れの挨拶をする際に「ごきげんよう」を用いている。父親に悟られまいとしている場面であるため、軽い挨拶として用いられた可能性もある。ただし、出会った際の挨拶の使用が 13 例であったのに対し、去る側の挨拶の使用は 2 例であったことから、近世後期江戸語とは反対に、当期では、出会った際の挨拶として多用されていたと考えられる。例 28 は、中流男性から中流女性に対して用いられた例である。この発話に対して、聞き手の女性は「機嫌を損じたと見て」とあることから、そっけない挨拶であることがわかる。

5. まとめ

以上、近世後期江戸語と比較しながら、明治期東京語における人の出入りの際の挨拶表現について、場面を四つに分類して見てきた。まとめると、次のようになる。表中、注目した表現や新しく出現した表現に下線を付した。

(1) 見送る側の挨拶「いっていらっしゃいまし」について

『日国』における「いってらっしゃい」の初出例は、1935 (昭和 10) 年である。その萌芽と考えられる「いっていらっしゃいまし」の例が本調査で 2 例見られた。近世後期江戸語では、見送る側の挨拶がほとんど見られなかったが (山田 (2023))、明治期東京語になると、「いらっしゃる」の発達とともに用いられる

【表6】明治期東京語における人の出入りの挨拶表現のまとめ

場面	使用する場面 (現代語の例)	山田 (2023) における挨拶表現	明治期東京語(明治20年代まで) における挨拶表現	『日本国語大辞典(第二版)』 の初出例
場面1	去る側の挨拶 (いってきます)	いってまいります、 いって参じます、 いってきます等	いってまいります <u>いってきます</u> いってくる	〔初出〕いってまいります (昭和18)
	見送る側の挨拶 (いってらっしゃい)	いってきねえ ※定型化した挨拶としての使用は 見られにくい	<u>いっていらっしゃいまし</u> <u>いりっしゃいまし</u>	〔初出〕いってらっしゃい (昭和10)
場面2	戻った側の挨拶 (ただいま)	ただいま(は)、 ただいまかえりました、 今かえりました等	ただいまかえりました ただいま	〔初出〕ただいま(洒落本)
	出迎える側の挨拶 (おかえり・おかえりなさい)	おかえりだ、おかえりか、おかえり	<u>おかえりなさい(まし)</u> <u>おかえりなさい</u> おかえりになりました	〔初出例〕おかえり(明治21) おかえりなさい (明治20)
場面3	訪問した際の挨拶 (ごめんください)	ごめんください系、 ごめんなさい系、 おたのみもうします	ごめんください(まし) ごめんなさい(まし) おたのみもうします	〔初出〕ごめんください(滑稽本)
	迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい、ようこそ)	いらっしゃいまし おいで系、 おいでなさる系、 おいでくださる等	<u>いりっしゃい(まし)</u> <u>きたまへ</u> <u>おいでください(ました)</u> <u>いりっしゃい(ました)</u>	〔初出〕おいでなさい(滑稽本)
場面4	出会った際の挨拶 (相互に使用可能) (おはよう、こんにちは等)	おはようございます、おはやいの	おはようございます、おはよう	〔初出〕おはよう(人情本)
		こんにちはは、こんにちは	こんにちは	〔初出〕こんにちは(滑稽本)
		こんばんは	こんばんは	〔初出〕こんばんは(洒落本)
	去る側の挨拶(さようなら)	ごきげん系	ごきげんよう、ごきげんよろしゅう (ございます) ※用例多い	〔初出〕ごきげんよう(洒落本) ※挙例は(さようなら) の意
		さようなら、さらば、おさらば等	さようなら	〔初出〕さようなら(洒落本)
去る側の挨拶(さようなら)	ごきげん系	ごきげんよう、ごきげんよろしゅう (ございます) ※用例少ない	〔初出〕ごきげんよう(洒落本)	
	よろしく申しておくれ、おいとま系	おいとまいたします、おいとま	〔初出〕おいとま申す(17C中)	
	—	失敬	〔初出〕失敬(浮雲 1887～89)	

ようになる萌芽を見ることができると同時に、去る側の挨拶も人間関係により使い分けが見られるようになり、挨拶として整いつつある様相を見ることができた。

(2) 出迎える側の挨拶「おかえり」「おかえりなさい」について

近世後期江戸語では、出迎える側は「おかえりだ」「おかえりか」を使う例に偏っていた。また「おかえり」は、「おかえりなさい」等の使用と同時に見られるはずであるが、近世後期江戸語では「おかえりなさい」の使用が見られず、「おかえり」1例だけが浮いていた。しかし、明治期東京語になると、「帰る」を様々な尊敬表現形式(「お～あそばせ」「お～なさいまし」「お～なさい」とともに用いるようになる。これらの出現とともに、現代語の挨拶表現としての「おかえり」が使用されるようになっていくと考えられる。戻った際の挨拶と

しては、近世後期江戸語に引き続き、「ただいまかえりました」「ただいま」が多くはないが、挨拶として用いられていた。

(3) 訪問した際の挨拶と迎え入れる側の挨拶について

訪問した際の挨拶としては、近世後期江戸語に引き続き、「ください」を下接した「ごめんください」とそうではない「ごめんなさい」、「おたのみもうします」が用いられていた。ただし、より丁寧な言葉遣いをする場合に、「ごめんください」を使う傾向が見られた。迎え入れる側の挨拶は、「おいでなさい」系から「いらっしゃい」系と「くださる」を下接した表現へと変化する。これは、当期の「いらっしゃる」の発達と「くださる」の発達が挨拶表現にも影響を与えているためであると考えられる。

(4) 出会った際の挨拶、去る側の挨拶の「ごきげんよう」について

近世後期江戸語から引き続き、明治期東京語においても、「ごきげんよう」が出会った際の挨拶でも、去る側の挨拶でも用いられている。『日国』の挙例は〈さようなら〉の意を表す例であるが、〈こんにちは〉の意を表す例も確認される。近世後期江戸語では、去る側の挨拶としての「ごきげんよう」の方が、形にばらつきが少なかったため、挨拶として固定化していたのではないかと考えたが（山田（2023））、明治期東京語の例では、出会った際の挨拶の方が用例数が多く見られ、一般的に用いる様子が見えた。

6. 今後の課題

本稿では、明治期東京語における人の出入りの際の挨拶表現について、考察を行なった。挨拶表現を用いる場面が少ないと感じたが、そのような点も当期の特徴の一つと捉え、そもそもどのように会話を始めているのかという視点から、挨拶表現よりも対象を広く指定して分析を行なう必要がある。今後の課題としたい。

◎参考文献

- 大竹秋江（1975）「狂言における挨拶語一虎寛本を中心として」『日本文学論叢』5
 倉持益子（2012）「「こんにちは」の履歴書」『言語と交流』15
 工藤真由美（1979）「依頼表現の発達」『国語と国文学』56-1
 田島優（2018）「さようなら考－その成立と別れの挨拶表現のシステム変化－」『東海学園 言語・文学・文化』17

- 田島優 (2020) 「人情本を利用した挨拶表現研究 (序説)」『近代語研究』20
『日本国語大辞典 (第二版)』小学館、2003
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』東京堂出版
- 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』東京堂出版
- 蜂谷清人 (1983) 「さようなら」『講座日本語の語彙』10、明治書院
- 諸星美智直 (1999) 「近世武家・町人のあいさつことば」『国文学 解釈と教材の研究』44-6
- 山田里奈 (2012) 「「いらっしゃる」系拡大の様相—江戸後期から明治20年代まで—」『早稲田日本語研究』21
- 山田里奈 (2014a) 「江戸後期における命令形による命令表現の使用 - 「お～なさい」「～なさい」「お + 動詞連用形」を中心に -」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』21-2
- 山田里奈 (2014b) 「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現—「お～なさる」系、「～なさる」系、「お～だ」系を中心に—」小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版
- 山田里奈 (2015) 「明治期における〈てくれ〉の尊敬表現—「～てください」、「お(ご)～ください」、「～ておくなさい」—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』22-2
- 山田里奈 (2017) 「江戸後期における〈てくれ〉の尊敬表現—「ておくなさい」系、「てください」系、「お～ください」系—」『日本近代語研究』6
- 山田里奈 (2023) 「近世後期江戸語における挨拶表現一人の出入りの際に使用する挨拶表現を中心に—」『実践国文学』104
- 湯沢幸吉郎 (1954・1957) 「第二 別れの言葉」『増訂江戸言葉の研究』明治書院

◎調査対象資料

『萬国航海西洋道中膝栗毛』(假名垣魯文、1870〈明3〉)(『明治文學全集』)、『牛店雑談安愚楽鍋』(假名垣魯文、1871〈明4〉)(『明治文學全集』)、『春雨文庫』(松村春輔、1876〈明9〉)(『明治文學全集』)、『金之助の説話』(無著名(「東京繪入新聞」)、1878〈明11〉)(『明治文學全集』)、『巷説兎手柏』(高島藍泉、1879〈明12〉)(『明治文學全集』)、『浅尾よし江の履歴』(無著名(「東京繪入新聞」)、1882〈明15〉)(『明治文學全集』)、『一読三歎当世書生氣質』(坪内逍遙、1885〈明18〉)(『明治文學全集』)、『新磨妹と背かゞみ』(坪内逍遙、1886〈明19〉)(『明治文學全集』)、『雪中梅』(末広鉄腸、1886〈明19〉)(『新日本古典文学大系明治編』)、『浮雲』(二葉亭四迷、1887〈明20〉)(『明治文學全集』)、『ふくさつゞみ』(山田美妙、1887〈明20〉)(『山田美妙集』2012)、『花間鶯』(末広鉄腸、1887-1888〈明20-21〉)、『処世写真緑蓑談』(前編/続編)(須藤南翠、1888〈明

21) (『明治文學全集』)、『乙女心』(石橋思案、1889〈M22〉)(『明治文学全集』)、
 『この子』(山田美妙、1889〈明22〉)(『山田美妙集』2012)、『細君』(坪内逍遙、
 1889〈明22〉)(『明治文學全集』)、『二人女房』(尾崎紅葉、1891〈明24〉)(『明
 治文學全集』)、『黒蜥蜴』(広津柳浪、1895〈明28〉)(『新日本古典文学大系明
 治編』)、『浅瀬の波』(広津柳浪、1895〈明28〉)(『新日本古典文学大系明治編』)、
 『五大堂』(田沢稲舟、1896〈明29〉)(『新日本古典文学大系明治編』)、『多情
 多恨』(尾崎紅葉、1896〈明29〉)(『紅葉全集』)

*本稿はJSPS科研費による若手研究「近世後期江戸語から明治期東京語にお
 ける丁寧語の体系変化に関する研究」(課題番号:22K13130)の成果の一部です。

(やまだ りな・実践女子大学専任講師)